

書 評

柴山 悦子・平島 裕子 著

「医療ケースワークの初歩的实践」

兵庫県リハビリテーションセンター
付属中央病院医療ケースワーカー 和田 正 人

「福祉元年」という言葉がマスコミでもはやされて久しい。この間、国や地方自治体では、社会福祉の制度や施策の充実がはかられてきた。

医療の場では、それらを必要とする対象者（患者）が多いにもかかわらず、そのことに関心がもたれないために、医療と福祉を結びつける医療ケースワーカーの配置は、極めて少ないのが実情である。

では、ワーカーの置かれている病院では、ワーカーのことが医療スタッフによく理解されているのだろうか。“存在”が知られているだけでは充分ではない。その利用の方法や効用まで理解されなければ、本当にその病院に根づいたとは言えない。しかも、今、ワーカーの専門性が問われているのである。

そのことに腐心するものにとって、本書はまさにうってつけである。

3章からなる本書は、ほとんどを著者達が扱った事例に費やしている。第1章は、本書をまとめる上での基本的態度を示し、第2章では、全ケースの内第9例までを

「時間の経過に沿わせながら記録する方法」（本書17頁）で示している。ここでは、ワーカーが患者に働きかける中で、患者が病気に立ち向っていくようになった経過が活々と描かれている。著者達の患者への信頼と仕事へのひたむきな姿が、読む者に感動的に伝わってくる。しかも、ワーカーが専門家としてとるべき医療スタッフへの関係がきちんとおさえられているので、中堅ワーカーの研究資料として、また後進への指導書としても大いに役立つであろう。第3章では、日常的に求められる援助例が53例も掲載され、「問題」「処遇」「効果」の3点で図式的にまとめられている。この方法は、深まりには欠けるが、ワーカーの機能を簡潔に説明する方法として注目できる。

とにかく、本書は、いつも患者に接する医療スタッフには是非読んでもらいたいし、患者の眼のふれる所に置きたい本でもある。

(A5 頁210 図2 ￥1800 〒160 1979)

医学書院刊